

苦所以終不答歟。君之至情。其在斯乎。其在斯乎。嗚呼。吾亦何言。然君病不能詳其狀。君
逝不能知其日。茫茫九原道遠。天涯遊子之悲人無知。嗚呼。疇昔放論快談。真是一夢。花
晨月夕。却斷腸。堙兮鬱兮。其誰語。追憶之。感轉不盡。感不盡而言則窮。唯有涕泗滂沱耳。
君靈如有知。冀了此衷情。嗚呼哀哉。

辛卯晚秋

梧園 笠 益 妄

海士の歌

嘯月庵主人

今は濱萩に風そよぐ
さしのぼる目に映らひて
追ひつ追はれつ戯れつ
夫は竿とり舟にのり
やがて影おくなりけり
酒をあたふめ肴さへ
早や日も西に傾きて
東の山に暇乞ふ
打あけ見れば隣なる

河内の浦のあさまだき
波静かなる海の面
泳くけしきの愛でたさや
いざや行きなんけうの日と
幸こそよけむ吾夫よ
とよなへて待つ汝か内に
入合つぐる鐘の音に
折りしも足の音すれば
翁よこそはありつらめ

これ歸りたる空の色
むれ居る鴨のさまゝくに
勇みたちたる釣の舟
汝か子を抱く汝か妻は
一際光りかゝやきて
夫や歸ると疑ひて

さけたる籠に充にける

鯛やゑびなやたち魚の

鱗の光りあざうにて

飛ひ立つ音に打ち笑ふ

翁のそはに吾が娘

鯛のかしらを指しつ

父や歸らむ其時は

かゝる頭は數しらす

娘ど共にはしを取

火をばつけつゝ吾夫や

魚に乗りてと祝ふ妻

娘ど共にはしを取

取置ては又止めまたはしを

とりて待わふ其折に

さつと落ちくる村時雨

窓のひまより眺むれば

墨より黒き空もよふ

胸うち騒き線香を

こは雨なりや風は又

今霄ばかりを過してよ

早く歸れな吾夫と

神にさゝげて祈りまし

早く歸れな吾夫や

早く歸れな吾夫と

言も終らず大あらし

窓ふさちぎ置て物のごし

胸うち騒き線香を

風！父や！どなき叫ふ

娘をすかしなくさめつ

床に添そで臥はなしつるも

岩打つ涙のいと高き

音に心は涙を追ひ

眠る娘を撫てながし

窓のそなたに近よれば

面をむらん様もなし

眠る娘を撫てながし

詮すべもかく立ちもどり

亦も娘をうひとれば

實に心なき幼子の

やさしき寝顔の可愛さに

せさくる思ひいやまして

長さよすがを泣きあかし

かさねて絞る海士衣

かわく隙なき涙なま

いそぎ吾屋を立ち出て

かくて程なく風もやみ

夜もほのくくと明るめば

いそぎ吾屋を立ち出て

茲の濱部あるこの磯

下りて呼へど答なく

昨日の朝のうらゝけき

よふある夫を捲きこみて

また立ち直る今朝の色

濱の砂にふしよろび

にくらき海の面なれど

南無阿彌陀佛をむあみだ

頼みと思ひし吾夫の

命を惜しむ恨めしの

かしろも夫やあるならむ

河内の浦の罪ふかく

さりたちのぼる波の上

はのうに見ゆる夕暮

實に變りゆく海の面

他なる人は他ながら

めぐりくつて又岩に

逢ふ人さへもなかりけり

人をけしきにさうい行き

あな悪龍のるばの具と

筑紫の海のあさましや

かたしく袖をかみえぼり

名残惜しまる夫の墓

吊ふ聲のいとかなし

去りにし跡の今までモ

涙にぬるゝ袖ともじ

蝦にも妻やあるならむ

渡りかねたる海士小舟

遠山の影もかまかにて

吾れみのこるいたはしや

あふしに合ひて今ぞしる

血縁ありけるやからさへ

上りて見れど影もなく

どみの嵐に浪たゝし

備へなえける一夜さに

見る毎にいやまざる

手向の手をば合せつゝ

あぢきなき世にすむ習ひ

引きよす綱にかゝりくる

いづくを宿と定む可き

奥に少さきかゝり火の

人の情のつれなさや

次第にうとむあさましき

心をやみに海士人の

うき秋のみを過すめり

新竹

園哲雄

新梢解籜帶芳芬。日補清陰在此君。爲有化龍棲鳳節。先看挺々勢排雲。

小林白水曰流暢可誦七絕中之上乘

櫻花

穠李夭桃不可誇。山櫻別自領韶華。粹然君子國中氣。發作乾坤第一花。

偶成

彼說連橫是合從。文壇筆戰各爭鋒。中興補翼誰山甫。未有風雷起蟄龍。

地震行

笠間梧園

已丑之歲秋七月廿八日夜地大震。轟然宛似萬雷落地。裂城陷不逾瞬。萬人徒跣走出屋。家財存亡不暇問。屋外結舍合四隣。同在禍中意更親。殆似同舟渡海客。殆似同病相憐人。連霄耿耿眠難熟。以天爲幕。地爲席。秋風肅颯吹枕邊。伴蟲空與雨露宿。震動頻繁無止時。誰不一沐三握髮。脚苟在地安免禍。欲學羽化登仙術。愁氣凝爲滿天雲。星斗無色。月氣黃。縣吏東西太勤苦。決意不顧歿與存。草鞋攀登山峯巔。徹霄傾耳探根源。大風洪水防有略。大地之震制無策。噫嘻。旻天果若吊斯民。何意設此禍。地底伏安得製出鐵。